

編集後記

私の父は、新聞記者であった。父の書くコラムには、時折、私と弟が登場していた。なぜこんな事を書くのかというと、ここで自分の近況を書き言い訳にするためである。我が家には、今、一歳児がいる。一歳児がいると、とにかく毎日が慌ただしい。一年前は、まだ父親（私）が手を出せる状況ではなかったのだが、今は、父親への拒否もなくなり、余計に慌ただしくなった。年賀状も1月半ばになってやっと出した。

少し研究の話をする、NTT乳幼児音声データベースというものをご存じだろうか。これは、幼児の誕生直後から5年間にわたっての音声を収録した縦断的コーパスで、音声言語の発達を研究する上で非常に貴重なものである。自分の子供の誕生前は、音声の録音をしていこうと考えていたが、実際に生まれてみるとそれどころではない。

昨年の編集後記では、担当になったばかりで何をどうすれば良いかよく分からず、次号ではもう少しうまくやるとか書いたが、このような状況で、今年の私の働きは、昨年よりさらにお粗末である。結局、2年間、編集担当としてろくな働きをしないままだったが、来年度は言語研究センターの運営委員を辞することになった。後任の委員は、優秀な方なのでご心配なく。次号では、編集者としてではなく、投稿者として本誌に関わりたいものである（また、取らぬ狸の皮算用か）。

今号には、4編の論文が収録されている。昨年と比べて少なめの本数だが、意味論、語用論、言語教育の分野の力作が揃っている。執筆者の方、査読者の方、事務職員の方、印刷業者の方に感謝申し上げます。（mk）